

選択制講義① テーマ2

「多文化共生社会とくやさしい日本語」

講師：一橋大学国際教育交流センター教授
庵 功雄

1 くやさしい日本語>が求められる背景

日本国内では在住外国人が増加し、コンビニや新聞配達など、外国人抜きでは運営できない分野も出てきた。今後、日本は外国人の受け入れに急速に舵を切る可能性がある。ただし、その受け入れ姿勢には、政府が「移民」という単語を一貫して避けていることから、多くの問題点がある。日本が「移民」を受け入れるとすれば、「言葉」から考える必要がある。

阪神淡路大震災以降、減災のための日本語使用法における研究から、くやさしい日本語という単語が用いられ始めた。くやさしい日本語は震災時だけでなく、平時における外国人への情報提供にも重要である。

2 居場所づくりのためのくやさしい日本語>

居場所づくりのためのくやさしい日本語>は、主に成人の在住外国人を対象とする。在住外国人が日本社会になじむためには、日本における「居場所」が必要である。そのためには、母語でなら言えることを日本語でも言えるようになることが重要である。この観点からの研究には、3つの側面がある。

外国人が日本で生きていく上で必要最低限の日本語教育を、公的費用及びプロの日本語教師の手で行う必要があるという「初期日本語教育の公的保障の対象としてのくやさしい日本語>」、地域社会の共通言語は英語や日本語ではなく、くやさしい日本語>しかないという「地域社会の共通言語としてのくやさしい日本語>」、大学や日本語学校で行われる「学校型日本語教育」と、地域の日本語教室で行われる「地域型日本語教育」では多くの点で異なるため、地域型日本語教育の実態に即した初級(地域型初級)をいかに構想するかという「地域型初級としてのくやさしい日本語>」である。

3 バイパスとしてのくやさしい日本語>

バイパスとしてのくやさしい日本語>は、主に外国にルーツを持つ子どもたちを対象とする。「移民」の受け入れには「移民」の子どもたち

が、その国の子どもたちと対等に競争し、自力で人生を切り開けることが重要である。そのために、必要な日本語能力を彼らが身に付けられる方策を研究する。漢字の問題、日常言語(BICS)と学習言語(CALP)の違いなど、いくつかの困難が存在するが、客観的な調査に基づき、新しいシラバスを構築することで、それが彼らの日本語習得における「バイパス」となり得る。

4 マジョリティにとってのくやさしい日本語>

くやさしい日本語>はマジョリティである日本語母語話者にとっても重要な意味を持つ。相手とのインターアクションは話し言葉におけるくやさしい日本語>の実現形だが、これはくやさしい日本語>が日本語表現の鏡として、コミュニケーション力を高める役割を担う。ここで、重要な理念の1つが「公平な耳」である。発音に関する問題は、客観的には些細なことであるにも関わらず、実際にはそれが差別につながっていることがある。こうした差別意識をなくすには、様々な日本語を等しく日本語のバリエーションとして聞ける「公平な耳」を持つ必要がある。

5 マインドとしてのくやさしい日本語>

くやさしい日本語>はマイノリティのためのものであるという認識が強く、言い換えの「技術」に関する問題と認識されがちである。しかし、重要なのは「技術」ではなく、「考え方(マインド)」である。相手が何を言おうとしているのかを理解し、自分が相手に何を伝えたいのかを常に意識しながら、日本語表現を分かりやすくすることである。それは、一言で言うと、「お互いさま」の気持ち」ということになる。



▲選択制講義① テーマ2